県立広島大学人間文化学部紀要　5，121-129（2010）

雑誌『台湾愛国婦人』の性格
―― プロパガンダ、そして近代文学発生の場として ――

下　岡　友　加

はじめに

愛国婦人会は戦死者の遺族や傷痍軍人（傷病兵）の救護・慰問などを目的とした婦人団体である。義和団事件（北清事変）の戦線慰問から帰った婦人運動家・奥村五百子が中心となり、近衛篤麿らとともに、1901（明治34）年、皇族・華族など上流夫人を会員として創設された。台湾では、1904（明治37）年に台北・台中・台南に三支部が開設され、その翌年に三支部を統合した台湾支部（台北・台湾総督府内）が新たに設置された。台湾全島会員4168人からのスタートである(1)。

この婦人団体の活動が、あくまで官僚（男性）主導のものであったことを、竹中信子は次のように指摘する。「代々職員は主事を台北庁長や総督府課長が兼任しており、主事補も事務員も大半が男性、明治42年から大正５年の間に末端の事務員として女性が10名働いただけで、あとは通算80名の男性が、役所の中に愛婦本部を置いてとりしきっているのである。独立した婦人の団体とは言い難いのではあるまいか。」(2)

また、洪郁如も「台湾における愛国婦人会の果たした機能や役割を検討してみると、政府と緊密な婦人団体という性格を遙かに超えて、それは明らかに日本の植民地統治構造の中の一非正規部門であった」(3)と論じる。

このように、総督府の植民地統治政策の一翼を担っていたと位置づけられる台湾支部が〈内地〉の愛国婦人会とは別に、独自に刊行した機関誌が『台湾愛国婦人』である。発行期間は1908（明治41）年から1916（大正５）年まで足掛け９年に渡り、年間最大86175部が刊行された（1914（大正３）年）(4)。部数から言えば、日本統治初期台湾における代表的なメディアの一つであったと言える。しかしながら、その内実については資料の閲覧が困難なこともあり、従来殆ど解明されてこなかった。

本稿はこれまでに発見されている資料から、当雑誌が会の趣旨や総督府の施策を援助するためのプロパガンダとして機能しながら、同時に統治初期の在台日本人による文学を生み出す場ともなった、そうした複合的な性格について明らかにするものである。

１．プロパガンダとしての役割－発行部数と視覚重視の誌面構成－

『台湾愛国婦人』は、『愛国婦人会台湾支部報』（稿者未見(5)）として1908（明治41）年10月22日に創刊。翌年１月から『台湾愛国婦人』と名義を改め、月刊雑誌として1916（大正５）年３月まで全88巻が刊行された(6)。

雑誌の版型は菊判、表紙は絵入り着色で、1911（明治44）年時には広告を含めると200～300頁に及ぶ、かなり厚みのある雑誌となっている。漢文欄が全体の４分の１から５分の１程度を占めるが、目次は日本欄とは別に設けられている。定価は発行当初は15銭、第50巻（1913（大正２）・１）から20銭に変更され、そのまま廃刊を迎えた。

創刊当時の台湾支部長（民政長官夫人）大島富子は、雑誌の刊行目的について、次の二点を掲げた。一点目は「此の会の趣旨を世におし拡めていや栄えに栄えしめんとする」ことであり、二点目は「婦

人の履み行くべき道を明らかにして朝夕に執り行ふ家の事々に便りよからしめんとする」[7]ことである。

大島の言う第一の目的は、雑誌の刊行によって確かに果たされたと考えられる。雑誌の配布数は、1910（明治43）年から1915（大正４）年の間、常に年間８万部を超えている[8]。これは同時期、台湾で刊行された他雑誌に比較しても抜きんでた数であり、月に7000部程度が島内に出回っていた計算になる[9]。雑誌創刊から丸１年を経た段階で、『台湾日日新報』（1910（明43）年１月28日）も、愛国婦人会台湾支部の会員数及び機関誌発行部数の順調な伸びについて次のように報告している。

●愛国婦人会の現状

本島に於ける愛国婦人会台湾支部の現状を聞くに42年末会員の数は特別会員2026人内終身961人年賦1065人及通常会員31457人その内終身8255人年賦23202人にして総計は33489人なるが41年末の会員数に比して（…）11451人の増加なり（…）因みに同会に於て発行しつつある雑誌台湾愛国婦人は之亦基金充実の資と為すべき目的にて経営しをる者なるが目下の会員全島にて約7000人あり雑誌の印刷高も今後は毎号7250部に上りつつありと

愛国婦人会台湾支部の会員増加には、1909（明治42）年５月以降、愛国婦人会の活動写真部が台湾全島に巡回興行を開始したことも力を与っていようが[10]、雑誌の刊行が愛国婦人会台湾支部の存在を誇示し、会を「いや栄えに栄えしめんとする」ための広報の一翼を担ったことは、発行部数からしてまず疑いない。

そして、雑誌の体裁はと言えば、第一に画報（写真）や挿絵、口絵が非常に多いことが特徴として挙げられる。視覚に重きを置いた誌面構成である。雑誌の巻頭には毎号のように皇族の写真、各庁の幹事や顧問、委員とその家族の写真が掲げられている。すなわち、天皇・皇族を頂点として官僚が支配する日本の権力構造と、その皇族や官僚夫人を中心として組織された愛国婦人会の役員構造が、いやがおうにも読者に刷り込まれる構成である。口絵には、台湾人の委員や会員、協力者の写真も掲載されており、誌面上での「内台融和」が、漢文欄の設置とともにはかられていると言えよう。さらに、画報の素材としては時事・風俗のほか、眺められる／支配される対象として原住民が度々掲げられているのが目につく。たとえば、「蕃人のさまざま」「蕃人のいろいろ」（第23巻、1910（明治43）年10月）、「牙阿顔蕃討伐記念画報」（第34巻、1911（明治44）年９月）、「ローブゴー方面討蕃地総督巡視画報」（第54巻、1913（大正２）年５月）、「南投庁下に於ける蕃人の銃器押収状況」（第76巻、1915（大正４）年３月）、「大正三年太魯閣蕃討伐画報」（第78巻、1915（大正４）年５月）、同（第79巻、1915（大正４）年６月）などである。雑誌代表者（愛国婦人会台湾支部主事・台湾総督府財務局税務課長）である高山仰が「発刊の辞」（創刊号）のなかで、「本島の情勢は内地と其の類を異にし東半部の峻山に蟠踞する兇蛮は未だ全く王化に潤はず」[11]と言及したように、統治初期の総督府の懸案事業である「山地討伐」への理解と協力が愛国婦人会会員たちには強く求められていた。そうした事情が雑誌の画報構成にもそのまま反映していると言えるだろう。

画報や口絵の多用による、読むというよりも見て情報を得る誌面の分かりやすさは、博文館の『日露戦争写真画報』（1904（明治37）年４月～1905（明治38）年12月）の成功以降定着した、〈内地〉出版界の戦略を積極的に活用したものと言えようが[12]、日本語の識字率の極めて低い統治初期の段階で[13]、圧倒的多数である「本島人」を主たる会員として勧誘しなければならなかった台湾支部にとって、それは極めて現実的で切実な手だてであったと考えられる。

2．文芸総合雑誌としての顔－〈内地〉の寄稿者たち－

では、雑誌本文はどのような執筆者や、内容によって構成されていたのだろうか。まず、機関誌としての報告文「支部報」は、職員の異動や「山地討伐事業」犠牲者の慰問を中心とした会の活動、「慰問金品寄贈」者と金額、救護金の支出先について記す。しかし、それらの報告文より圧倒的な分量を占めて本文に掲載されているのは、評論（医療・衛生含む）、婦人のための修養記事（料理、育児、家事、茶の作法・箏曲歌解など）、小説、和歌、俳句、講談、落語、お伽噺、読者投稿欄、懸賞問題といった一般の婦人総合雑誌に見まがう多岐に渡った内容である。

ちなみに〈内地〉の愛国婦人会機関誌『愛国婦人』も様々な記事を掲載しているが、『台湾愛国婦人』の方が頁数が圧倒的に多いこともあり、内容の充実ぶりは際だっている。執筆陣の豪華な顔ぶれも目をひく。愛国婦人会幹部のほかに、当代一流とされる著名な教育者、学者、婦人雑誌関係者の寄稿が以下の通り確認できる。

1915（大正４）年から1916（大正５）年にかけて、評論の寄稿者には、新渡戸稲造（75・80・81・84・85・86・87・88／数字は巻数をあらわす。以下同様）、棚橋絢子（82・84）、羽仁もと子（84・86）、青柳有美（77・85）、三輪田元道（79・84）、宮田修（79・84）、 岸辺福雄（75・83）、久留島武彦（75・78）、安部磯雄（79・82）、江原素六（80・87）、高島米峰（75）、呉文聡（76）、坪内雄蔵（77）、沼田笠峰（77）、阪元雪鳥（82）、跡見花蹊（83）、前田慧雲（82）、後閑菊野（86）、塚本はま子（77）、鳩山春子（76）、山脇房子（79）、矢嶋楫子（84）、広岡浅子（83）、前田たけ子（85）、浜尾作子（82）、嘉悦孝子（84）らがいる。

また、文芸欄（附録）には、与謝野晶子（75・76・77・82・83・84・85・86・87・88）、国木田治子（74・78・82）、徳田秋江（77）、土屋文明（榛南）（74・75・76・77・78・80・83・88）、前田曙山（80）、真山青果（81）、佐藤紅緑（82・83・84・85・87）、岡本かの子（83・85）、与謝野寛（81（ただし評論）・87・88）らの小説、歌、脚本、詩が掲載されている。

上記以外にも瀬沼夏葉（74）、巌谷小波（74）、長谷川時雨（74・75・77・78・80）、三宅花圃（80）、泉鏡花（80）の評論や随筆も掲載されており、雑誌は明治・大正期の主要な日本近代作家の作品を常時掲載し、その点では〈内地〉一流商業文芸雑誌にも遜色ない相貌を持っているのである。

上田正行は、著名な文学者たちが当雑誌に大量に寄稿している点に着目し、その理由について、原稿料がかなり高く設定されていたのではないかと推測している[14]。総督府の後ろ盾や会の威信のためにも、そうした設定がなされていた可能性は高いと稿者も考える。さらには総督府官僚であり、雑誌代表者である高山仰の力もそこには働いていたようである。その事実を端的に伝えるものとして、次のような訪問記事がある（「与謝野晶子女史を訪ふ　在京記者」第37巻、1912（明治44）年12月）。

「ヤア此の間は失敬・・・・」と快活な鉄幹氏、

「台湾の高山様から御丁寧な御手紙を頂戴しましたから何卒貴方から宜敷・・・・」と淑な晶子女史。(…)

「奈何ですか、此頃は御執筆にお忙しいでせう」

「エヽ何の斯んのと始終追れ勝でそれに子供が大勢ゐるものですから落付て書く事が出来ないので弱ります、台湾愛国婦人の方へも毎月何か送稿する積ですが・・」

「台湾と云ば愛国婦人は中々盛だネ、什麼して当地だつてあれだけの雑誌は少ないよ」と鉄幹氏が引取て

「全くお世辞ぢやない、あれ丈のものを地方で発刊てゐるのは大に誇る価値があるよ」

この記事から、高山が自ら書簡をしたため、与謝野晶子夫妻の原稿を所望していたことがわかる。高山は大正５年１月、新竹庁長に栄転し、愛国婦人会の役職を離れることになるのだが、同年４月には、愛国婦人会台湾支部のために特に功績を残した者（「特別徽章拝受者」）として表彰されている[15]。彼が名実ともに雑誌代表者として大きな働きを担っていたことがうかがえる。

なお、高山の異動後に発行された、第87巻（1916（大正５）年２月）、第88巻（1916（大正５）年３月）の奥付には代わりに「発行兼編集人」として加納豊の名が記されている。加納豊は、1908（明治41）年９月から1916（大正５）年２月まで「愛国婦人会台湾支部嘱託（後事務員）」として雇用された人物である[16]。彼の雇用期間がそのまま雑誌の発行期間と重なっていること、「編輯主任」をつとめていたこと（『台湾愛国婦人』第81巻（1915（大正４）年８月）掲載の英塘翠のお伽噺「巖男と竹男」巻末に、「加納編輯主任」への謝辞がある）、そして、後述するように、自ら小説を執筆していたと考えられることなどから、彼は雑誌編纂や文芸にひとかどの知識と経験のある人物だったと見られる。『台湾愛国婦人』のいわば「文芸総合雑誌」としての顔を、高山とともに形づくっていた中心人物であろう。

ただし、一女性団体機関誌としては不釣り合いとも言える、『台湾愛国婦人』の誌面の充実は、高山・加納の個人的嗜好に拠ると了解するだけではもちろん十分ではない。小山静子は〈内地〉の『愛国婦人』が「愛国婦人会の機関紙という性格を超え」、「幅広い内容の記事を掲載していた」所以を、「家庭内役割に没頭している女性たちに国家意識を喚起し、女性たちが軍事後援活動を行うようになるためには、女性に対する社会教育と家庭の改良が必要なことを、愛国婦人会は見抜いていた」[17]からと指摘している。小山が指摘することは、「山地討伐事業」を領台以降、長年に渡って行わなければならなかった台湾において、〈内地〉以上に必要な「女性教育」であったと言えよう。

1900～1910年の間、台湾総督府官僚であった持地六三郎は「婦人と殖民地文学」と題した文章を当雑誌に寄稿している（第41巻、1912（明治45）年４月）。そこで彼は「殖民地のことを描いた小説の如きもの」＝「殖民地文学」が日本では未だ見られないと述べ、「日本の殖民地」が「思はしい成績を見ることが出来ない」のは「日本の婦人達は未だ殖民事業に対する興味といふものが薄く」、「その成功を助けやうと云ふ観念に乏しい」がためとして、次のように婦人の手に成る「殖民地文学」を要望する。

> 今日婦人は婦人ながらも我が新領土の改善、文化の増進を助けることに余力を費やし真に殖民事業の完成を期するやうにしなればならぬ。今日、日本の殖民地は台湾に朝鮮に婦人の働きを要する事は甚だ多い、或る物は既に著手されて居る。併し未だ、前いふ通り殖民地文学の如き者の世に出てゐないのは甚だ遺憾とする処である。之れは是非とも婦人の手に依て初められたいものである。

ここで文学は「殖民事業」の一翼を担うものとして位置づけられている。雑誌を通じての「婦人教育」は、植民地政策推進の一方法として早くもこの時期に男性官僚によって目論まれていたのであり、持地のような考えを持つ官僚の存在が、『台湾愛国婦人』の「文芸」作品を多く含んだ総合雑誌化を実現させていたと把握できよう。

３．在台日本人の文学作品掲載の場

日本の領地の拡大とともに〈内地〉作家は、自身は〈内地〉に留まったまま、自らの作品の市場を

〈外地〉へと確実に広げていった。その様相が当雑誌には如実に見てとれるのだが[18]、彼ら／彼女らが提供した作品のなかに雑誌の発行場所である台湾が表象されることは、ほぼ皆無であった。

そうした状況に対して、雑誌も終刊に近づいた大正3年から5年になると、台湾在住と考えられる作家の活躍が目立ってくる。なかでも注目されるのは、かなり長い期間に渡って連載された次の三人の作家たちの作品である。

①英塘翠「生蕃お伽噺」（74・75・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87）
②白鷺山人「空中女王」（78・79・80・81・82・83・84・85・87（前編完））
③加納抱夢「夢」（78・79・80・81・82・83・84・85）

①の「英塘翠」とは西岡英夫のペンネームである[19]。「生蕃お伽噺」は各回とも一話完結で、各原住民の間で昔から伝わるお伽話を紹介する。文学作品として見た場合、語りや描写の表現に稚拙な点も見受けられるが、「生蕃お伽噺」が連載された1915～1916年、西岡は台湾総督府法務部民刑課に勤務しており[20]、雑誌運営側の人間（関係者）であった。そうした立場や原住民の「討伐事業」を推進する会の意向に沿って、寄稿の機会が与えられたものと考えられる。

②の作者・白鷺山人は何者か、全くの不明である。この小説の内容については別に詳しく検討したので[21]、ここでは詳しくは繰り返さないが、①同様、作品の舞台（の一部）を台湾山地（「ブヌン族のカンタバン蕃に属す一小部落」）に設定していることは注目される。小説冒頭で語り手が「討蕃事業」に関する一通りでない知識を披露していることからも、作者はおそらく台湾総督府関係者か、それに近い人物と考えられる。この小説に描かれた日本人は愛国心の塊であるとともに、「生蕃」を助け、彼らと共に暮らし、彼らに尊敬されるという人物として造型されている。当時の在台日本人の理想と夢が色濃く投影された小説と言えよう。

③の加納抱夢（加納抱夢庵主人）は、高山仰の転勤後に発行兼編集人となった加納豊ではないかと推定される。その根拠は「附録小説」というかたちを取って長い期間雑誌に相当な枚数での連載を行い得ていること、「抱夢庵主人」が台湾北部で行われた雑誌の「読者大会」における不手際を、主催者として詫びる記事（「読者大会の記」第79巻、1915（大正4）年6月）が存することである。この小説の主人公は大学卒業後、身一つで台湾へ飛び出し、しばらくパイナップル酒の製造に取り組んだ青年である。当時、新天地・台湾で新事業を始めた主人公同様の経歴の持ち主は無数に存在したと考えられ、「夢」は台湾に住む読者にとって、極めて身近な等身大の日本人男性を主人公としている点に特色を持つ。

従来、統治初期台湾における日本人の文学活動は、漢詩を除けば特記すべきものはなかったとされている。たとえば、松永正義は台湾の文芸の期間を三つに分け、在台日本人による本格的な近代文学の創作開始を「1930年代も後半になってから」としている[22]。

第一の時期は、1895年の領台から、1905年の日露戦争終結時期まで。この時期の主要な創作は、漢詩文だった。（…）

第二期は、1905年頃から1920年代中頃まで。この期の主な創作は、短歌、俳句で、漢詩は日本本土と歩調をあわせるようにして衰えてゆき、近代文学はまだ在台日本人の間ではほとんど行われなかった。短歌、俳句については、さほどすぐれた作者は現われず、多くは業余の手すさびに終わったようだ。

第三期は1920年中頃からで、この頃からようやく近代文学の創作が始まった。詩の創作がもっ

とも早く、1922年後藤大治によって創刊された詩誌『熱帯詩人』は、そのはしりといえよう。
（…）だが、実際に近代文学の創作が在台日本人の中に根を下ろすようになっていったのは、もっと遅く、1930年代も後半になってからではないだろうか。

一般的に首肯できる把握であるが、既に見てきた通り、『台湾愛国婦人』には、在台日本人による作品が生まれはじめていた。彼らの作品は、台湾で暮らした体験や、そこで得られた知見なしには成立し得ない内容である。これらの作品は、在台日本人が統治初期の台湾でどのように暮らし、何をまなざし、如何なる価値観を持っていたかを知る上で、貴重な資料たり得る。雑誌は統治初期の段階で在台日本人の手になる、近代文学創出の場として機能しはじめていた。

まとめにかえて－史的価値と今後の課題－

『愛国婦人会台湾支部25周年』（台湾日日新報社、1929（昭和４）年）は、『台湾愛国婦人』の廃刊理由について、次のように述べている。

抑々愛国婦人会の通常会員は１ケ年僅々１円の会費さへ地方に於ては納入困難なるの時恰も出版界の好況に際し、新奇なる婦人雑誌続出せるにより内地婦人は競ふて新刊内地雑誌を購読し、大多数の会員たる本島婦人は未だ読書趣味を解せず従つて誌代の滞納を免れず、一面又編輯上よりは一般の風潮に倣ひ体裁を向上し記事の精選に腐心するの結果印刷代嵩みて定価引上を必要とするに至り、遂に経済上の調節を困難ならしめたり。故に支部経営の事業にして当時改廃を緊急とせるもの少なからずと雖も此の雑誌発行の如きは其最たるものとして其存続は経済上到底許容すること能はざる事情となれり。

言うまでもなく、愛国婦人会台湾支部の会員の大半は本島人で占められており（1915（大正４）年時・内地人8063人、本島人70533人）[23]、漢文欄が別に設けられていたとはいえ、どんなに〈内地〉で名の知れた作家の作品を掲載しても、台湾島内における雑誌購買者の大半には読まれていなかった（読めなかった）というのが実態であった。

『愛国婦人会台湾支部沿革誌』（台湾日日新報社、1921年）に拠れば、雑誌が生み出した赤字は大正４年度末（廃刊３箇月前）で、全島（12庁）幹事部の総計「大正３年末雑誌代収入未済額　7.100円・718、同四年末雑誌代収入未済額（大正５年度繰越）8.905円・013」にのぼっている[24]。この「経済上の調節」の「困難」が雑誌廃止の最大理由であったとされるが、時期的に見て、佐久間左馬太総督による「理蕃５カ年計画」がひとまず終了し、慰問救護の必要性のピークを過ぎたこと、既に台湾支部の会員数が一定以上確保されたことなどが、赤字を押してでも雑誌を運営し続ける意味を失わせたものと考えられよう。総督府官僚主導の経営は、在台日本人による近代文学の創出の場をあっけなく失わせた。

『台湾愛国婦人』の研究の意義について最後にまとめておく。当雑誌を分析していくことは、第一に、統治初期の女性団体の活動と総督府の政策履行におけるメディア利用の在り方を見ることにつながる。第二に、日本近代の教育者、評論家、文学者の作品を多く掲載した当雑誌は、彼ら（彼女ら）の業績を再検討する材料たり得る。第三に、大正４・５年時には、台湾を作品舞台（の一部）とする文学作品の萌芽が見られ、極めて早い段階での在台日本人による近代文学を確認できる場である。こうした史的価値を見据えて、今後は個々の記事、作品のより精密な分析とともに、未発見資料の収集

につとめ、雑誌の全体像を浮彫にしていくことが喫緊の課題である。

注

(1) 大橋捨三郎編『愛国婦人会台湾支部沿革誌』（台湾日日新報社、1921年）23頁。
(2) 『植民地台湾の日本女性生活史　明治篇』（田畑書店、1995年）145頁。
(3) 「日本の台湾統治と婦人団体－1904～1930年の愛国婦人会台湾支部に関する一試論－」（『立命館言語文化研究』10巻　1999年２月）
(4) 台湾総督官房統計課『大正３年台湾総督府第18統計書』（1915年）133頁。
(5) 現在、未発見。『愛国婦人台湾支部報』については大橋、前掲書、146頁。
(6) ただし、現時点で当雑誌全88冊のうち確認されているものは34冊に止まっている。その内訳は、国立中央図書館台湾分館（台湾・台北県中和市）所蔵15冊、山武市歴史民俗資料館所蔵14冊（ただし不連続で欠損が多く、いずれも完本ではない）、立教大学図書館所蔵１冊、個人蔵４冊である。これまでに発見されている冊子のうち32冊については、上田正行「資料『台湾愛国婦人』文芸関係主要記事」（『中心から周縁へ－作品・作家への視覚』梧桐書院　2008年）が、文芸欄を中心とした目録を作成している。稿者も台湾分館所蔵15冊分及び第60巻については、目次を紹介している（拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』目録－大正四年一月から大正五年三月（廃刊）まで－」（『広島女子大国文』第22号　2007年12月）、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置－第六十巻を中心に－」（『日本研究』第22号　2009年５月））。
(7) 大橋、前掲書、146頁。
(8) 台湾総督官房統計課『大正３年台湾総督府第13統計書～第20統計書』（1911年～1918年）
(9) 大橋、前掲書、136～143頁。
(10) 大橋、前掲書、146頁。
(11) 大橋、前掲書、39頁。
(12) 池内輝雄は複数の雑誌の検討から、1904年初頭には「読者のニーズが活字メディアから写真・絵画メディアへと移りつつあったらし」いとの指摘を行っている（「変換される「事実」－戦争雑誌のなかの文芸欄－『日露戦争実記』と『軍国画報』」筑波大学近代文学研究会編『明治期雑誌メディアのなかの〈文学〉』2000年６月）。
(13) ちなみに、台湾総督府官房臨時戸口調査部『大正四年第二次臨時台湾戸口調査結果表』（1918年）によると、「種族（細別）及体性別読ミ書キノ程度」（日本語の仮名能力）は、「内地人」の「読ミ書キ得サル者」が23.63％、「本島人」の「読ミ書キ得サル者」は97.68％にのぼっている。
(14) 「日本学者上田正行将訪国家図書館尋宝　台湾愛国婦人謎底探索」（『中国時報』1998年４月16日）
(15) 大橋、前掲書、208頁。
(16) 大橋、前掲書、731頁。
(17) 『「愛国婦人」解説』（柏書房、2008年）13頁。
(18) このことについては既に拙稿「拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置－第六十巻を中心に－」（『日本研究』第22号　2009年５月）でも論じた。
(19) たとえば『台湾教育』第169号（1916年６月）で、西岡は「汀花君！何故死んだ」という文章を「英塘翠」の名で投稿している。大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』（上田信道担当執筆　大日本図書株式会社、1993年）には、彼の経歴について「報知新聞などを経て台湾銀行、台湾煉瓦など台湾の実業界で活躍。傍ら台湾に住む漢民族や少数民族の風習・伝承に興味を持ち、

民俗学的立場からの研究を行う」とある。

⑳　『台湾総督府文官職録』（台湾日日新報社、1915～1916年）

㉑　拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の文芸欄－白鷺山人『空中女王』の描くもの－」（『現代台湾研究』第33号、2008年３月）

㉒　「台湾の文学活動」（『岩波講座　近代日本と植民地７　文化のなかの植民地』岩波書店、1993年）224頁。

㉓　大橋、前掲書、116頁。

㉔　大橋、前掲書、149頁。

［付記］本稿は日本台湾学会第11回学術大会（2009年６月６日　於日本大学）での口頭発表「雑誌『台湾愛国婦人』の基本的性格」に、加筆・修正を施したものである。コメンテーターの洪郁如氏をはじめとして、ご意見を下さった方々に厚く感謝申し上げる。

県立広島大学人間文化学部紀要　5，121-129（2010）

The character of the magazine "Taiwan Aikoku Fujin"

Yuka SHIMOOKA

Abstract

The magazine "Taiwan Aikoku Fujin" was published in Taiwan from 1908 to 1916.

It was Taiwan of the early period of Japanese rule. At first, This magazine played a role as the propaganda of the policy of the Japanese Government. But, In the most close, the magazine carried new modern literature written by Japanese who lived in Taiwan. This magazine is the precious document to know the early policy of the Japanese rule and to know the thought of the living-in-Taiwan Japanese in that time, so the collection of document is an urgent problem.